

「地元漁師なら誰だって、一昔前より魚が捕れなくなったことは感じている。日本の啓発活動で、水産資源を守り育てることの大切さは理解してきている。でも、漁民は日々の暮らしの糧を海の恵みから得ている。禁漁期などの資源管理活動に漁民全員の同意を得るのは並大抵のことではないんだ。」
(セネガル西部の港町ジョアールにて)

食用魚介類の供給量 史上最高に

「世界漁業・養殖業白書2010年」(国連食糧農業機関「FAO」)によれば、世界の漁業・養殖業は08年に約1億4200万トンの魚介類を供給した。うち1億1500万トンが食用で、一人当たりの年間供給量約17キログラムは過去最高であった。過去10年間にわたり世界の漁獲量は増加していないが、養殖の生産量は大きく伸び、食用の魚介類のうち46%は養殖でまかなわれている。サハラ以南アフリカでも、この10年、漁獲量に大きな変化はないが、同じ量を確保するための労力やコストは増加しており、資源量の減少が心配されている。また、養殖業は発展途上にある。だが、人口だけは増えていく。

JICAは約30年間、アフリカの持続可能な漁業の振興に協力してきている。2011年1月、水産専門家が集結し

箱養殖に取り組む 「すべての人に魚を」

ベナン南部の町アブランクに暮らすエリザベス・グベメヌ。JICAの「内水面養殖普及プロジェクト」(2010〜2013年)で実施された研修に参加し、箱養殖※に取り組んでいる。養殖を始めて18カ月。3度の養殖に成功した。利益は決して多くはないが、女性たちが所得を向上させる有効な手段であることを実感している。

エリザベスは読み書きができない。しかし、プロジェクトの要請を受けて地域の希望者に対する箱養殖研修の講師も務めており、研修を通じて新たに箱養殖を始める女性の仲間が増えつつある。夢は、魚を求めて彼女のもとへ来る人全員に、いつでも魚を提供できるようにすること。

アフリカの養殖をより一層普及していくために、JICAは「アフリカ内水面養殖協力指針」を策定している。ベナンでは、国内消費の魚のうち半分を輸入していることから、養殖農家を増やし、養殖を地元の経済活動として定着させながら食料へのアクセス改善を図る試みだ。

貧しい国ほど 魚介類が貴重なタンパク源に

「一番好きなごはんは、イワシでつくったチエブジェン！」

そう話すのはセネガル南部のサンゴマール半島の先端に暮らすマイムナちゃん。魚(ジエン)と野菜の煮汁でご飯

Report from West Africa

特集 世界の食料問題に挑む

魚はアフリカを救う。

大西洋に面した西アフリカの国々には、日本人同様、魚料理を好んで食する人々がたくさんいる。世界の海は安定して一定の水産資源の供給を続けるとともに、養殖業が発展したことにより、2009年、水産物供給量は過去最高を記録した。安全で栄養価の高い水産資源を持続的に確保したい。魚はアフリカの夢を実現できるのか。

文：本間謙(JICAセネガル事務所 広域企画調査員)

今後の協力方針を話し合った。

会議では、食料安全保障の観点から水産資源管理の重要性と養殖振興の必要性が討議され、脆弱な行政組織の下では、日本式の「漁民組織による資源管理」とアジア式の「農民主体の養殖振興」の有用性が確認された。セネガルでは、漁業関係者のイニシアチブで漁業関係者と行政が共同で資源を管理していく「漁民リーダー・零細漁業組織強化プロジェクト」が実施されており、ボトムアップの資源管理の実現を模索している。ゲイ氏の所属する漁業組織もこれに参画中だ。

(チエブ)を炊く、セネガルの代表料理だ。サハラ以南アフリカのほとんどの国では、日本やアジアの国々に勝るとも劣らない魚好きなのだ。

人間が摂取する全動物性タンパク源に含まれる魚介類の割合は世界平均で6.1%。これに対し、アフリカを中心とする低所得かつ食料不足が深刻な国では20.1%にも上る。もっとたくさん魚が手に入れば、マイムナちゃんはより多くの良質な動物性タンパク質を摂取するだろう。

食料安全保障の確保を考えたとき、水産物は魅力的な切り札となり得る。安全で栄養価が高い水産資源の持続的利用と増産が、食の量と質、栄養の改善のみならず、雇用や輸出を通じた所得向上、外貨の獲得など、食料安全保障の実現に果たせる役割は大きい。

持続可能な水産業の発展が、今後のサハラ以南アフリカの開発の重要なカギになっていくことは間違いない。

ゲイは言う。

「おれが捕った魚で、一族郎党を養ってきた。みんなおれの魚が好きだと言ってくれる。魚は食いぶちだけじゃなく、一族の絆、男の誇りと夢も与えてくれた。せがれは漁師を継ぎたいと…。漁業を、廃らせるわけにはいかねえんだ」

アフリカの魚には、無限大の可能性が秘められている。

